



繪本琉球軍記
初篇
九



~ 13
3554
9



門 13
355
卷 9



繪本
琉球軍記 卷之九

目錄

帶刀諸將怒敗績

仁木勝氏智計破徐晟

琉球勢惣敗軍 附 徐晟討死

仁木勝氏首帳記

繪本琉球

卷九

目

早稲田大學圖書館
33.11.10
藏書

勝氏命松尾勝邦向龍雲城

繪本流球軍記初篇
卷之九
目録
繪本流球軍記初篇
卷之九

繪本流球軍記初篇 卷之九

帯刀怒渚將校績

けとれ志多近においぬ常よその時ふすと率は法軍
と二ふふころら流球勢と申ふれその先陣後陣のいんご
うけ通人とすみりまとも元來敵は目ふ余の大軍殊文
先陣の初ふれ勇志志多なる勢とすもせびさんて
打破りられが右へを月と退るりりり古妻の烟動勢由
是房狭炮の兵士計百余人と美さ死ふすの勝むる月
る球兵の申へ一發ふ打入れられ先ふさる流球勢をこ
くと打たれられ二日余人枕とるて死しられは波急動

解由大いふいそいけ様よのり突くつせと長坂乃港
 切されとそろへく突くまは後ふりり大船係最るぞ
 大なるおるりと又例の偈月刀と打り子勢と率一を去
 されふおとを出せりさる味方と励一はまが先より
 打てりまはびついで御政楊文元ホが子勢死ん子負
 とそそへくそへ大花とらへて殺すよど烟が兵勇
 子とくもけ勢い少碎易とそりひ方へ引りりる赤
 七妻は後へは秋月左の耐之也三ふ余人使と勢登不
 互は勢見ふひるぐと清とて故とまふ勝をそと
 る琉球勢一万いふ余騎と共死ふそと何のま扱もつる

へこそ秋月が勢小打てりるふ千勢い敵のころぐご
 大山の麓へふひりく只一身小秋月が勢と打破りれ
 へ之輩齒ぐとて怒るとくも勢ふ方へ引近く
 去るふ小薩長勢七むんの使と敵は勇小切くつされれば
 江本三ふ方の三ふ余人松尾隼人正三ふ余人が合ふ
 軍勢と一ふ合一集使と操と一勝を門る琉球勢
 けすん中へ西もやひ切てりるを勇とさるて血戦い中も
 江本三ふ方の大いふつらけ陣と破るまゐる軍陣の勢
 本るりぞと破るま何面目小ふおのそと合さんや付
 死せよんてと自りま川先を港と合一員も引くと

敵ふより大將徐晟海軍なりたる小敵此陣とるるよ
 以て備へん旗本と人々を以て備へたる只心ぞい
 此軍勢のさるるに軍勢のさるるに味方此法勢を
 能て中りるに備へんと破るやと大將此旗本とるるに
 力とつてつて下つて小切に功名せよ人々とて勢合
 してまき万八の余騎まのりて小突入りけり此法勢帯
 刀の俣勢求ると法よの小法小とるるに河をさるるに
 け有るよとるるに大い小勢なりかてり始終味方此敵なる
 べし某の先小備へるにかきまて敵小勝なり此法
 ののらるる不甲受る人々中つて中とるるに引よせ法

軍と引く馳向んと旗本加勢とるるに壯く急人の馬此
 勢ふとるるに君おふるにひあわりの中と軍師の命とも
 あさふみどり小敵軍小向ひ万一勝るとるるにたの却つて
 人小敵とるるに君よとるるに思慮を加へ只いあとかさちりて
 雲城の敵と信ぬ君の出のあふりて終雲城のま出ま
 味方此大敵軍とおるるに向きつてたのきりどとよ味
 方此備へ破まると小軍師の本陣ありもさるるにせんと
 らまるとるるに必死あるに計のゆゑのあれに君あつていらぬ
 むと法とつてと練じまごもさるるに大敵とて敵を上
 撃つてよとるるに横田加勢とるるに打擲しをせ



とひりやくと忽ち後北条のいより備ふ新北条と致して
 一は軍勢ふ余人のいふ擇んで能く是れは能く
 城の按司鄭文朗といふ者清風藤の合戦とき武平松
 の按司芳良とがひ日本勢の後とびんと今け西へ
 出まりし法軍勢とてさうさればこそ軍師のまをさふ
 遠近をく付て薩の勢に武勇をたしめよと伴勢が良
 考中川右左衛門権左衛門と進んで打てりまは法軍
 とふしと主人の下知もたつて我れとと勇すとこ
 狭籠と打ちけ矢と射りけ関の要とつげてりけりりまは
 琉球勢大まもれ右佐左衛門切立と下馬もすむる能

り又若井内へ逃入るれ帯刀とてさうさるると飛
 雲のいよすもけ勢ふまは能く能く城とまると逃り
 お合付て追まると立切まはまは法軍何れも勇まは人
 勢烈凡のどく獲まは追まはつと若の内よは軍
 勢も先陣の故まは小流まはさんぐも逃りも勇ま切る薩
 勢追つめ切まはとて血海とひりり追まらり

勝氏定計破徐晟

とどめより仁本武蔵守のおまはれまはより合戦の糧ま
 目も放まはえ物しておまはれが九段まは人の後お徐晟が勇
 又河よりまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

然れども且も中々勝つて作らざるなりは勢に余余人合
 戦の備へとありに本松尾が陣中へ使と立ち中をせざる
 御戦ひ危く入るゆゑに味方換七を内ふとめく御引
 とりゆべし某別ふ必勝の計男こそをりりと中々あつて
 りればけとれに本松尾が勢に大気とらして戦ひわれ
 とどろけ勝つと合戦おろとれれば本松尾が下知はほひ
 標引よたたくこそ引りりるを徐成が大軍只一戦よ
 蔵書が本陣と打破り日本勢と勢のごとくるべしと勇
 ましいとて備へとすむ時よ大将徐成率よ徳軍と制し自
 陣路よ馬とのり出とるうふ武蔵書が備へとるふよと

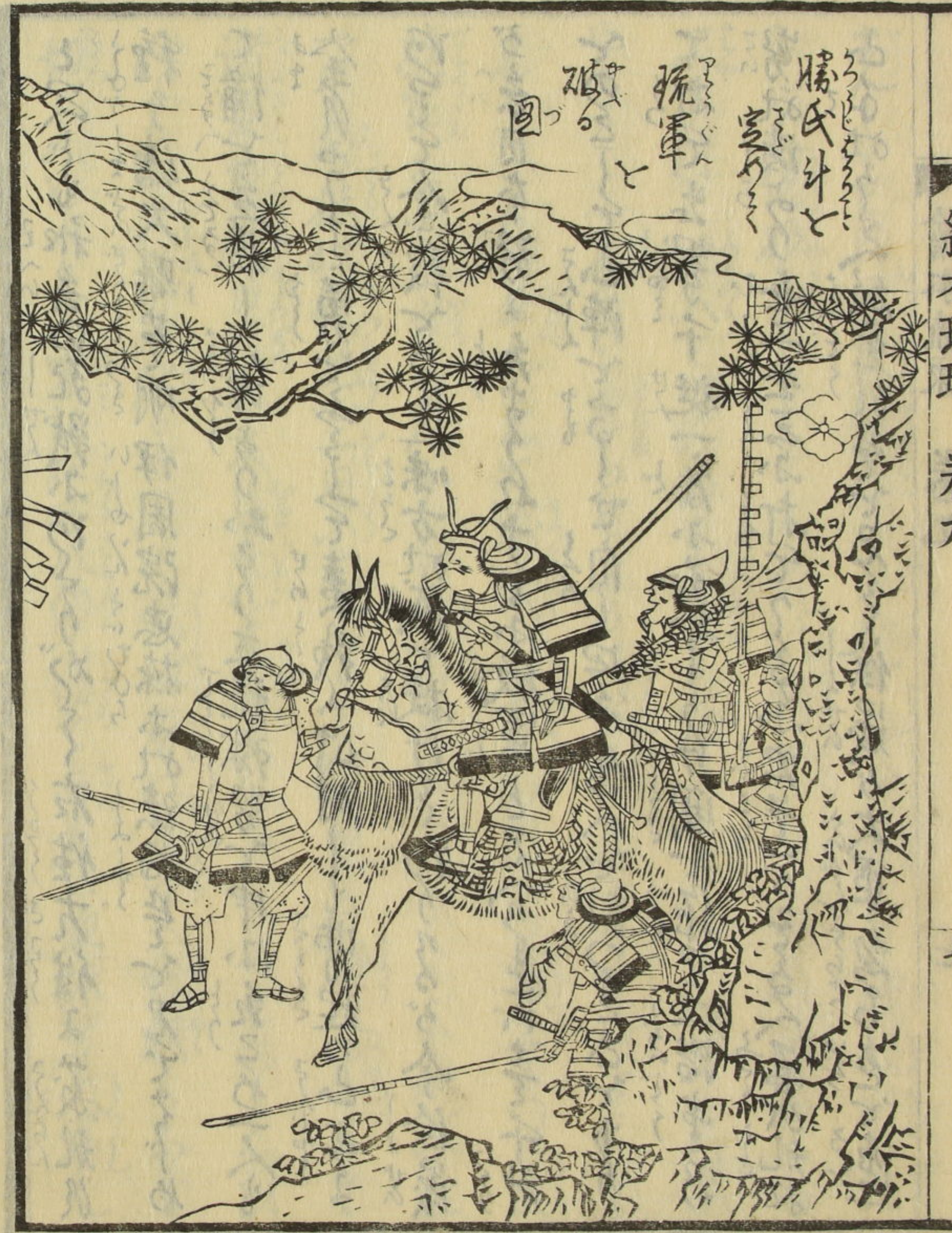
千とささみお丈の日月の大馬とやわらき軍師武蔵書
 が千と日の出と立不廉角の甲とつとれ身よい御おどけ
 と着し腰よい金佐つとれちかかと佩右けよいおまよりなま
 りり金れ米記と御門よりたのよよい十六と月日の旗と標
 げよたふるふまごころとた右ふ二十と人の勇士と引つと大る
 中れりふるよと備へとせ足将れ旗池祖一五人竹束とまよ
 立堅城れごころ備へとるふと外の軍勢法よありて排烈
 一里屋と書とるふと色の旗とやふふと備まるとふ
 名よして実ふも熱大おれ本陣とあつて中々破りごころ
 ぞつとふりりし琉球勢とつとて互ふ面と足合せ急よ進

せんもせの只後徐晟が下知と傳徐晟も又け形勢は
 一らん法が不向き中りるに備中も亦形勢は
 ありしに徐晟の徐入せば大なる浮らありし人召品もつくと進め
 やとてふふも門で忽ちそれれ勢も下知軍中何となく
 まゝとればはとて勝氏の来死あり馬の上まつと立
 款軍とてふさめれつと者ども進めやくと下知と伝
 一千余挺の銃炮と一月小なりくと叙らる煙中より
 諸軍勢彼日月の大馬車とまされよとてめすつとむ
 りつと大勝れ起るごとく琉球勢は中へ今取もあ
 切て入りつと幸ひは方八面小切て也まは琉球勢大軍え

とくども和まの死戦ありつと右性左性も亦れは
 種々諸大船も明伴周院忠棟も法相もとてとどめ
 て備と立並一方ありおろり立琉球勢と申ふれつと一人も
 余のわつと勇とつとて責教つけ時し曹起いふよ
 りつと金鼓とるし味方威と掛けつとつらるが今徐晟
 がま日本勢もえつとれすてふ彼軍とえつとまはまき千斗
 とのこしと山陣とちつとせ自しは余人と引つとつとつり
 て打て出撃千挺一隊もさつとけ関と作つと二階半の乃
 勢は後よりを二を三打てつとるふおとつとる人再びれ
 ぶふれつとて奴をいふとつと徐晟が大軍勿ら色と速



勝氏計と
 梳軍
 破る
 圖



大殺一陣一方とけ破り烟が備ふ打てくる幼解由大いよ
 惣目自れ進むひわのく敵ふりありあてく内小梳兵十二
 んと突こほし千も亦も二三ヶふと負どあしも引ゆる必
 死よる月と責難ふ勝氏をとるよりも烟討する及有也
 けよつてけくとあつまひ伊周院里んが輩力とつてて幼解
 あり徐晟が勢たあり祥さたてるとて突さるりこそふ
 烟幼解由の婿男同苗富之助座座今年十七歳勇健
 無双れ美武者あてこそふし出立花中あして万軍中
 小有ても一際まてくる美者あて又れりり口尺びりた大者
 刀と打り村雲さる琉球勢中へ突てりけ入あてり

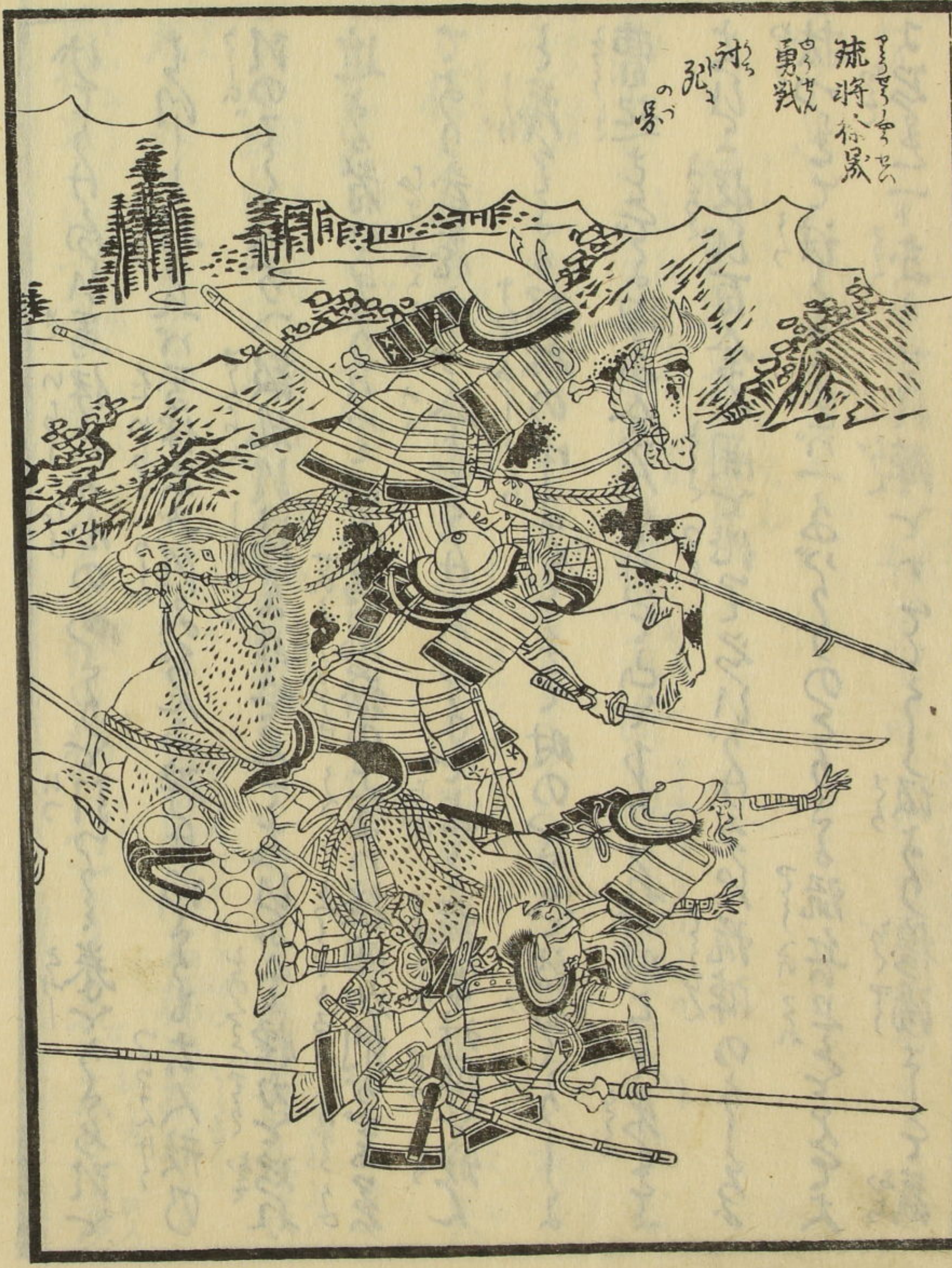
きい切てあふふ子勢敵する者多く物々騒々として討つ者
 殺しまた大なる徐晟をとりて勝と小冠者が権糸うまいで
 下打りてくまんと彼偃月刀と打りあてりけりて討てくる
 烟富の助兵とてあてりあてりあてりあてりあてりあてりあ
 白い一柱一本とて死せむとせむせむせむ二人大花とらり
 して敵いぐ徐晟つとるとりけよせ一妻あつて偃月刀
 とろり上右れ肩より左の腕取へりけて只一刀ふをくるとん
 と切ておれり鳴る懐ひべり烟富は必十七方と一朝とて
 尸ハ梳土ふとせども名の後代ふのとてけ富之助の
 容貌員藤中とてあても武術の人ふ敵とれば大守の孫遇

深うりしが今日けあまく討まらるとお久し海ふきをさう
ふくくやも嘆れらる

琉球勢惣敗軍

去れども千石もこよ申れ可ふ及んであ方此軍入り
互ふふと力と河とそい勇とさうやく戦ひらるが戸の物
と横り血の海と流き山下の血河とすり圍の森矢
さけびの者い天ふとさうとさふひびれおろきさうのさん
ふ一畑劫解由道度にあまれ討まるとるより怒気横
たんとわつらま中んく進んで戦ひらる伊周院お株の敵おる
馬俣右といふ者と戦ひらるが獲の柄と打とりおれが火と度

けとりけ向い馬俣右が心のゆらりと引つら巻とらめれ
をのりと打りねばる伊右がれみだん小待けゆらも去人形の
隙のてく八方へ散れに法軍をさて大いふを怪力とあれ
近よる者いるうりらる時ふ唐風森の上より桂田加納がま
てより武蔵おが命とらけ火のよとさく琉軍は陣と燃ん
と茂るる松林の中よかまて討のいんと待ぬらりよ
曹起とさよはる余人と引とらりられば時こそ来まて
大いよ怒び百余人圍と化してひがけられ琉陣のうら
抜つら討らるまびらぶりのそのらる琉兵とさて大
よとま一とまもせび陣とすてらる坂より穆陽とて



龍馬の巻

九

けりる日本勢と追ひ山よりけ並べたる陣へて交ふ火
 とりけしめもあやむらりの時のまどらげりれば山下不戦ひる
 徐晟が軍勢をてりて大ひよおどろきする一たすりごと
 つつとこそらま二人も戦んとする者あり、我者らどことしよ
 逃上りんとすると日本勢大ひよとて追つめく打ころん入
 も歎する者あり、恰も州と刈ぎてく討する首級一まひ大ね
 徐晟とてんをたすつて今のまどをり快く戦ふて討
 死せんと心を決し討められたる士卒三百余人とあつてく
 勝つてける日本勢とせんぐも四てとて今の甲も打おとされ
 大いなるすむこととて橋本まで血よそとる徳川刀とうち

ぶり命をとり不戦ひしつて見がらむ今枝條義徐晟と討
 んとくけ向ひ十合ざり戦ひるがけつて引返くを
 こそ武蔵守勝氏が勇長完戸をたすま束久世おのりぬ
 つまて切てうらとて徐晟が勇小つりぐく完戸をたすま
 一刀ふ切て流るる久世おのりぬをたすけつて引返くを
 三やうくと引返く撞きつ大膽大出刀と打つり徐晟は向
 て討てける徐晟大は怒りて力とらげて向ひ合し二十余合戦
 ひるるが勝負の色さふふ久世は加多田國藏といふ者三人の漢
 ちあしん子とあまきとふ矢つがひ逃くとあり徐晟と目がひ
 て討つりらふそと矢徐晟が右に肩に中やられれども事とも

せは抜さそく 戦返に血戦に種々傳も中々勝つことと知
 ると久しと戦ひを止むいと死餘最後と知るもふと人
 此邊兵とどく付是今の兵一身とありれば何れよと大
 筋とさうり合はく付死せんと村雲まざる大軍中へ切て入
 八方よりけりられも今の敵を死せしむと負ひぬ今の是
 とどまりとんと決し自ら首を切おし 清風以下はあつと消
 ぶらりそく亦揚文元のはか下左のがら糸殿は手紙を
 付き首文紙の墨見がらふ付を許侯の文川軍人よとれ
 李應解の二階堂がらふ付をせに殿の烟がらふ付をそく亦
 をじめ一万八千人とすへ一軍勢或の首め入いれ海系

して僅一日はありふるぐとびりけとれ曹起の味方た
 卒のそく付を進返さそく究つられが只候く付死さそく
 一真土のみ中げふ款は太ねと付より名と後の世よのそく
 んとそ卒よいつれ針とらに出入り自づ儘とそくそげさそく
 かさうそく死しる日本人の遺甲とそく死よりそくそく流
 球人死首と打てに建のそくそく勝氏が本陣よそく
 び入るがけとれ勝氏いそくふのり大馬車はよそく法
 軍よ下知とそくかそくと曹起しそくやめりそく中よそく
 近とそくけより懐中より短刀と抜ぎ一兵しそくそく突
 くる勝氏すそく身とらに被袂持とそくよそくそく



仁本勝氏
曹起
鉄の付
ころん圓

打まへられバ憐むべし曹起の乱を以てし腦を以て微塵と
めくたししりらる

仁本勝氏首級と記

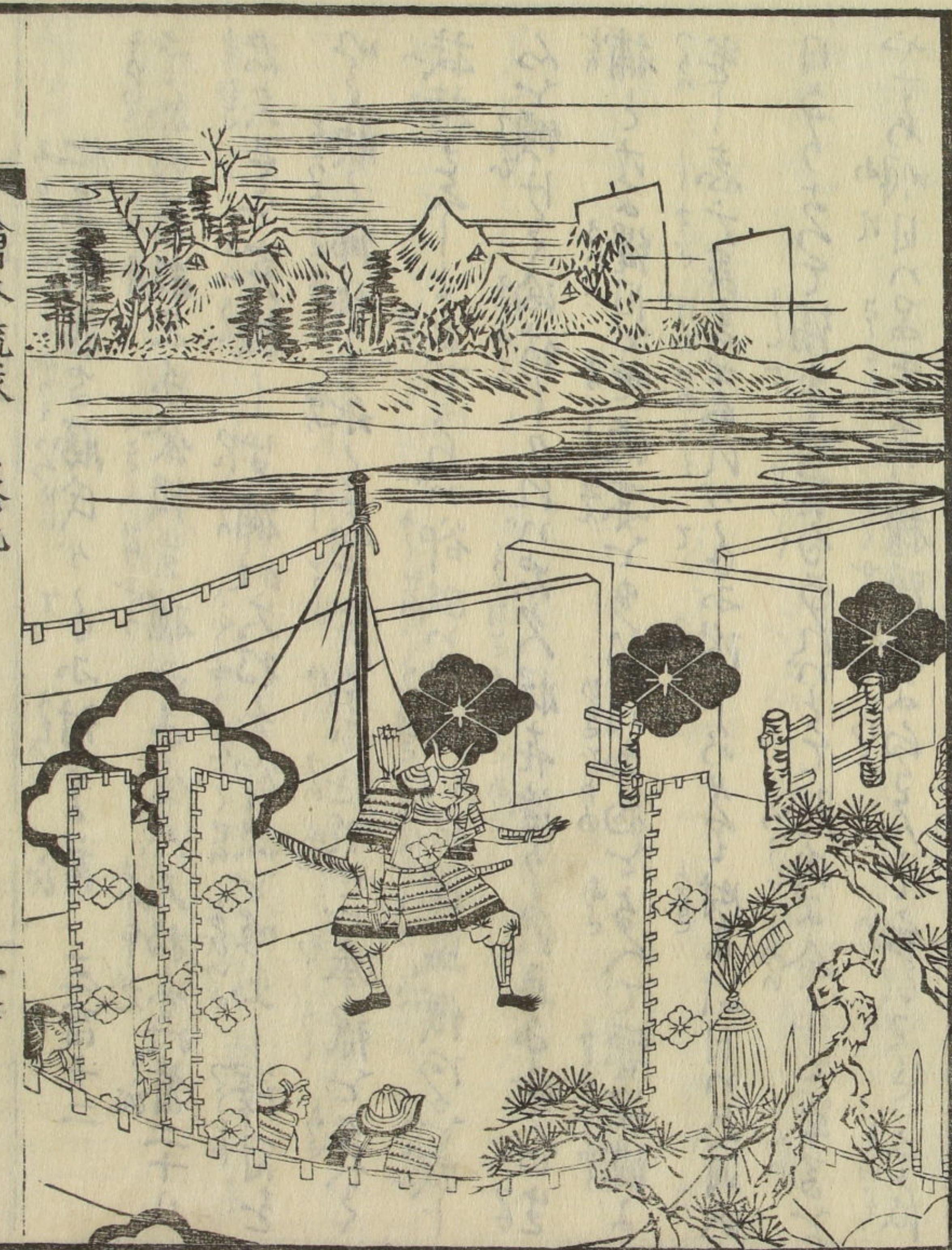
楚の項羽ハ七十に殺れ被ひは殺とあるふらうしは終る
埃下ハ一戦ハ打ちけ鳥江のふ池と消西楚ハ自業勿ら
たれ去バ琉球の前軍ハ軍校尉徐歳ハ日本勢ハ十段備へ
航ハ九段と打破りし中軍ハ一辰仁本勝氏ハ備へお
んでまへられ勇氣勿らふくどられ終る大敗軍とありし
今ハ勇ハ三ふるふりハ即ち智の足ふるふらうしは
まはらふ二万余ハ軍勢一戦のしふとび徐歳もまては丸

軍内ハ付た一其余ハ大敗軍と亡び今ハ一立者一人も
まらられも却改ハ尚二三百の軍と率ハハ中が勢と戦
いハ中が連し叶とびと名ひられ道とゆらて逃さうんと世
不とハ中が軍勢ハ方より死るも二三百人ぞりハ軍勢一人
も少ハ生捕られが却改ハ大いハ力と敵ハハ中が軍勢ハ
子ハ内ととり者ハ生捕まらり伊周院ハ持一者ハ清風
よとせよられハ法軍勢ハあしと炭上より中が軍勢
と何げハ勝軍と法方ハ赤らり武蔵守ハ軍使とゆ
合戦のハ牙と中久よと云よ一られハ忠久ハ大いハ志
多ハ言書取と止る勇候城と中久と中久ハ旗本ハ大勢

と率して清風苑を屠陣せしめれば法が陣中まで出
 進み勝氏が本陣に後下勝家此の身と逐一と云上り
 久保忠久志きりまは法が此働と稱せしめ又烟勘辨
 由とる出し修れりるの汝が一子富之助討死と逐一は
 慈傷のやどあふしつりと此徒ありつるが勘氣由平依して
 中らるの号々我君の仇と名どれりる素本國とありか
 一命の已より死者とそ病体ひ法よけは牌が討死の武
 士とる者此面月まで何ぞは是と慈ひとけりゆべと云
 上りれば備後の人々感涙を流しつるそ後武蔵守備
 氏諸の此功名と記録し且首級を討して大馬忠久に献る

其甲の方のごとく

- 種子福太郎明がふ小討とる首級 三百八十
- 伊園院左衛門尉忠棟がふ小討とる首 三百六十二
- 畑 勘解由三郎がふ小討とる首 三百四十三
- 二階堂備前忠盛がふ小討とる首 三百十八
- 秋月左衛門尉之兼がふ小討とる首 二百九十三
- 里見大内藤久秀がふ小討とる首 二百三十五
- 志テ多近にちがふり討とる首 百八十七
- 松尾隼人公勝邦がふ小討とる首 百八十一
- いかに二宮の左衛門尉重信がふ小討とる首 百四十六



仁木勝氏
松尾
集人子
命トセ
龍雲殿
向
因

仁木武蔵守勝氏が子小付と首 三百十二

千石の首級三子余級生捕五子余人大將を首二十八
お久と実檢し生捕れ大將を卻政と出し澤司を
以て快く歸休し永く志テ家小庭明せば奉養と云々
扶持まゝと云せられが卻政の忠久の仁徳威儀の感
んと傾けし由休しられお久悦在淡々此お余人の生
捕と云え繩目と使酒宴とあり引出ぬと云へて要漢城
を志テまゝ蓋取が子小付しりるを討よけ日又月又
日ありよつて瑞午は言ふるればと勝氏も命じて軍を
やすめ明日の早天より穆陽城を向ると云ひしにそ

松尾草人正勝邦と振と是下今ありお勢と率し率
就雲城小越を佐野伊勢が合しとの小味と責とり
り又就雲城佐野おが子小落去しそも有るは是下
止と是とあり支那の恵さぬけと引れと首傍らるべ
差てやしあつと云々面々相互よ力を曲けみどり功と
まんとするものれ也そも法よ肖るると罪と乳し中
べり是下けと佐野伊勢おと達しそ必は漢らるれ中
せしとべりと命とりれが草人正達んで承知し率し
余騎の子勢と率し就雲城へと進發し
徳本琉球軍死巻く九終

